静岡県で活躍する医師

焼津市立総合病院

病院事業管理者兼病院長
関　常司 医師

腎臓内科を専攻したきっかけと魅力を教えてください。

関 医師　私が腎臓病学を選んだ理由の一つは臨床においては生理学的知識に基づいた電解質管理や最新のガイドラインに沿った血圧管理などはもちろんのこと、肺所見や皮膚所見の確認など腎臓だけでなく全身を診る必要があることです。さらに血液透析その他の体外循環治療や腎生検、腎移植などの専門的手技や知識を習得することが可能であり、非常にやりがいのある臨床分野と言えることです。もう一つの大きな理由は急性腎障害、慢性腎臓病、慢性糸球体腎炎などの分野だけでなく腎生理や腎再生など研究分野としても非常に幅広く極めて魅力的であることです。実際私も1988年から1991年まで腎生理学の研究のためドイツ・フランクフルト・ゲーテ大学生理学教室に留学し、主に近位尿細管に発現しているナトリウム・重炭酸共輸送体NBCe1に関する電気生理学的研究を行う機会に恵まれました。帰国後には、当時東京大学医学部附属病院(以下東大病院)小児科が症例報告していた眼症状を伴う遺伝性近位尿細管性アシドーシス(OMIM 604278)についての共同研究を通じて、NBCe1遺伝子の変異が同疾患の発症原因であることを世界に先駆けて報告(Nat Genet 23: 264, 1999)することができました。このように腎臓病学は基礎と臨床を繋ぐことも可能な分野です。

院長に就任してからの現況を教えてください。

関 医師　当院は静岡中部に位置する焼津市及び周辺住民に対する地域医療中核病院(病床数423)であり、特に救急医療・周産期医療・難病医療・災害対策などに重点を置く急性期総合病院であり、急性期充実体制加算も許認可されています。当院の特に強みとする周産期・小児医療や脳卒中・脳神経内科関連専門疾患などの分野については、市内に限らず志太榛原地域の中心的存在となり広域から患者を受け入れています。また泌尿器科・腎臓内科も充実しており2019年から開始されたロボット支援(ダヴィンチ)による泌尿器科手術は既に200例を超えています。また2023年には東大病院泌尿器科および腎臓・内分泌内科の応援を得て、10年ぶりに生体腎移植術を2例施行し無事に生着しています。一方、当院外科でもスタッフの充実を図り2023年からはロボット支援による大腸癌手術を開始しています。
当院の基本理念は「地域の信頼に応えるより良い医療の提供」であり、笑顔と挨拶をモットーに職員一丸となって地域の基幹病院としての役割を果たしています。第三者評価としては2023年1月にNPO法人卒後臨床研評価機構(JCEP)、また同年2月には日本医療評価機構からの訪問評価を受審し、それぞれ２回目および５回目の認定を取得しています。初期研修については１学年定員10名で、東大病院、浜松医大、山梨大学からたすきがけも受け入れています。専門医研修については内科と総合診療の基幹プログラムを有しています。

医師を目指す方や若手医師にメッセージをお願いします。

関 医師　当院の初期研修医や専門医をめざす若手医師はいわゆる common disease から稀少疾患に至るまで多数の症例を経験することができます。また熱意にあふれた指導医が多数在籍しており、地域の中規模病院ではありますがその指導内容は決して他にひけを取るものではありません。研修医・指導医合同による症例検討会や海外論文抄読会、さらにはCPCやキャンサーボードなどを通して、病院全体で診療と卒後教育のレベルアップに取り組んでいます。なにより看護師・コメディカルなどの他職種間の風通しも良く働きやすい環境が整っている病院です。一緒に働き学ぶ意欲にあふれた若いドクターが焼津を訪れるのを待っています。

プロフィール

関　常司 医師

趣味

・水泳

私は1982年東京大学医学部を卒業後、東大病院で研修を開始し、その後は東芝中央病院、国立王子病院などの勤務を経て、2015年３月末まで東大病院に在籍し2015年4月に当院へ赴任しました。
私が旧第一内科に入局した当時は東大病院も他の国立大学附属病院と同様に総合内科制度で運営されていましたので、長年にわたり自分の専門分野である腎臓病以外に一般内科や他の内科専門分野の臨床にも関与してきたことが自分の財産だと自負しております。
その後、東大病院も臓器別編成となり、私も2004年からは東大病院腎臓内分泌内科の講師・外来医長として臨床・研究のみならず医学教育にも力を入れてまいりました。